

研究

佐伯城 絵図解説 (四)

会員 小野 英 治

今回は、佐伯城の櫓絵図について述べてみることにいたします。

佐伯城の天守閣の図なるものは、未だ発見されていませんが、二重櫓の図は数葉、吉田家に伝来所載されていて、その規模、構造の大略を知る事が出来ます。

揚載の図は、本丸と西出丸二重櫓図で、原図と同大です。

佐伯城の櫓について触れる前に、城郭の櫓とは、どのようなものであるのか、といったような一般的概念ともしいえるものを知る必要があると思いますので、簡単に説明することになります。

城の櫓は、物見を目的としたものと、倉庫より發達したものとがあり、この両目的が合体して、近世城郭の櫓が誕生するのですが、古く矢倉、矢蔵の字を当てるのも、攻め寄せる敵を攻撃するための他に、弓矢、武器を設置していたことをよく物證つています。

櫓はその規模、構造によつて、平櫓・二重櫓・三重櫓等あり、その設置場所によつて、隅櫓・角櫓・鬼門櫓・表櫓・民櫓等もあり、貯蔵内容によつて、武具櫓・弓櫓・馬具櫓・米櫓・塩櫓等とも呼んでいる。またその用途によるものとして、台所櫓・井戸櫓・水櫓・人質櫓・着到櫓・太鼓櫓・月見櫓・花見櫓・塩見櫓・化粧櫓と、実

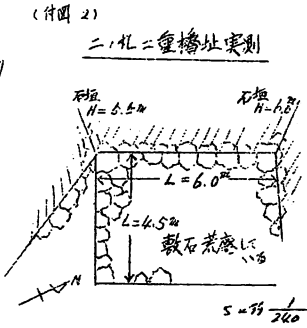
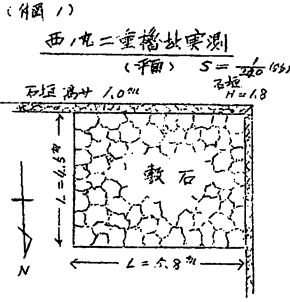
ににぎやかです。又他城の櫓を移築したものと思わせる伏見櫓、宇土櫓、清洲櫓等もあつて、また構造により、高欄櫓・菱櫓、中には人形を付したもので、姫路城のように、いふはで名付けたもの等、実に多種多様です。

そこで、櫓の設けられる位置ですが、城で最も弱点となる位置、つまり隅角が死角を形成するので、ここに設けられた櫓が最も多く、中には、墨壁すべてにあたりぬ櫓の如く、長く設けられたもの、又府内城の如く、屈折がない石垣では、その墨線上の中程に設けられるなどされていきます。

城郭の櫓の特徴としては、外観は美しく造られている反面、内部は堅固第一にしていますから、荒削りの骨組を露出させ、薄暗く陰気なものとなつており、石落し、銃眼、狭間等が設けられていました。

さて、佐伯城の櫓ですが、各曲輪に二重櫓が一基宛あつた事からか、その名称は、本丸二重櫓、二ノ丸二重櫓等と呼称されていた事が、吉田家伝来図、温故知新録等で知られますが、その特徴としては、全て下見板張であり、武階を外観でありましたが、これは度々の修理の際にも、旧状のまま変更せず修築した事を物語り、幕府の出した武家諸法度さ、忠実に固守していた事も推測されるのです。

また、二図とも、全く規模は同じですが、享保十五年写の秋山家文書で調べてみますと、佐伯城の櫓は、二ノ丸、西出丸、北ノ出丸二重櫓がほぼ同規模ですが、本丸腰曲輪二重櫓は、ひとまわり小さく、本丸櫓は、天守の代用とも思える程の規模(梁行四間二尺、桁行六間二尺、内之方西側桁行十間半)を有し、変形の櫓であつたようですが、現在このあたりは、毛利神社造営の際石段を設



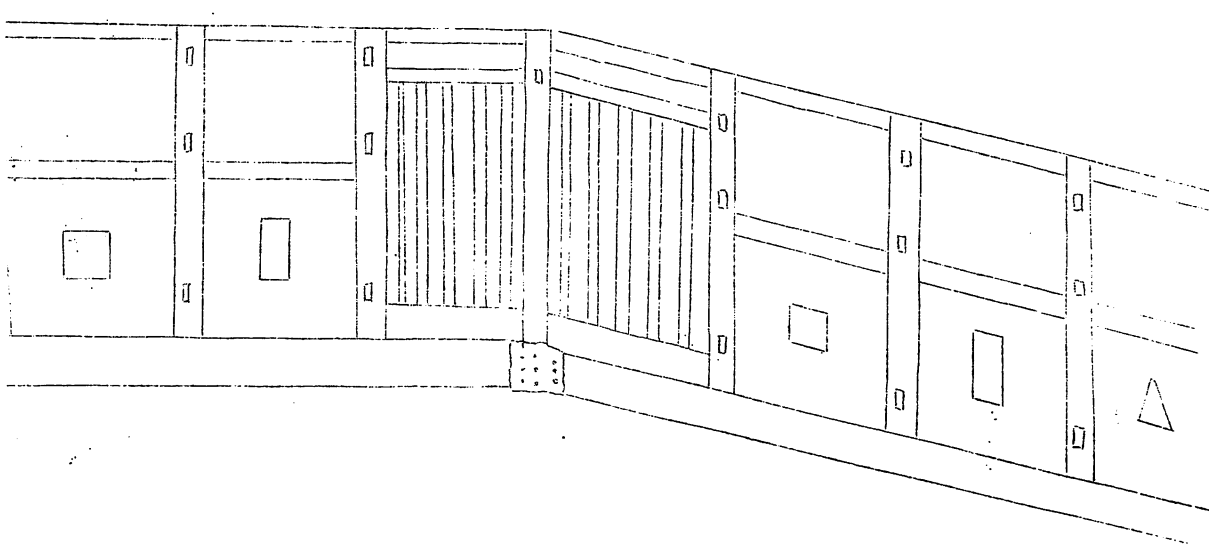
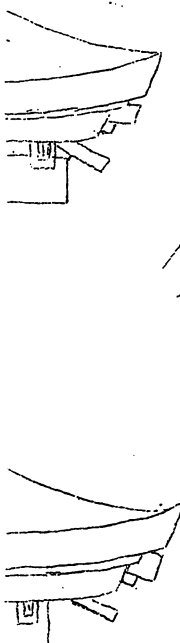
けたため、旧状が著しく失われ、その実測（礎石による）が出来ず残念です。

さて、ここで問題になるのは、吉田家伝来図に、御木丸二重御櫓（この絵図）と、西御丸梁行図（裏面）が、両首全く目大という事です。秋山文書では、本丸二重櫓と西出丸二重櫓は、全く規模が異つてゐます。

そこで、本丸二重櫓と二ノ丸二重櫓が該当いたします。（梁行三ノ丸）

そこで、吉田家図には本丸二重櫓と記してゐるのは、二ノ丸二重櫓と書き誤つたものではないかと推測されますが、あるいは、これは証明出来ませんが、本丸二重櫓を享保十五年より後縮小して建て替へたのではないかとも思われます。年代の記入のない絵図であり、かゝる二重櫓址の実測も出来ない現在では前者が有力でしょう。

なお、両図を三十倍いたしますと、梁行四ノ二米となり、西出丸、二ノ丸櫓址の現状と一致いたします。（付図参照）

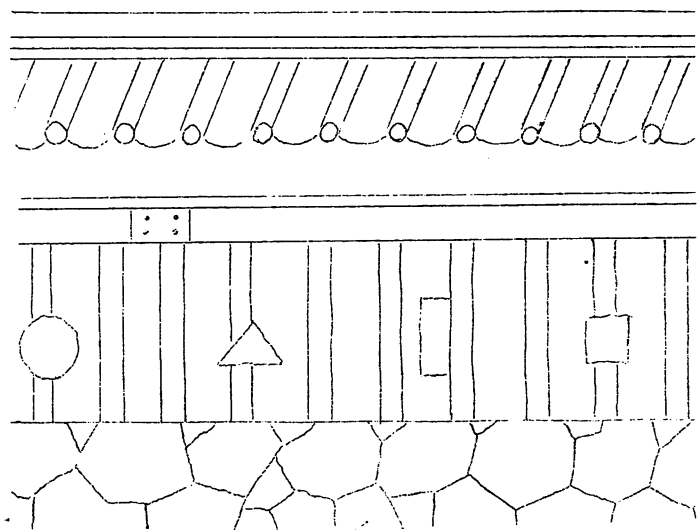


研究

西御丸二重櫓

三階分一圖

ににぎめかです。又他城の櫓を移築したものと思われる
伏見櫓、宇土櫓、清洲櫓等もあつて、また構造により、



次にこの櫓は、二者共に石葺しがありませんが、これは西ノ出丸二重櫓においては、石垣が低いためへ高さが一（二バツ）であり、その設備がなかつたものとも思えますが、二ノ丸櫓址の石垣は比較的高くなっているのに、やはり石葺し、銃眼等の設備がありません。これは二つの事が考えられると思ひます。先づ、大工さんの図面である事から、このような建築構造上不要なものは、付加的なものとして、故意に図に記さなかつたか、あるいは修理の際して、無用の長物としてなくしたかへつまり平和な時代となつたので、のいつれかと考えられます。

つぎに、佐伯城の櫓全般にいえる事ですが、一、二階とも懸し柱を使用していることです。一、二階の広さが同大であれば安定感に欠けるので、外側の柱を内に傾け、わずかに二階を縮少しており、二重目を初重に比較して著しく低くして、安定感を増すように工夫しているのが注目されます。又屋根瓦が描かれておりませんが、これは下地であり、もちろん土瓦葺でありました。

本図で次に注目されるのは塀です。本丸二重櫓図では、その構造がおかり、西御丸二重櫓図では、その外観がわかりますが、櫓同様下見板張で、挟間（防衛用の○□△などの

小窓、弓矢を射たり鉄砲を撃つたうすの種類の多く、いかにも
実践向きな城といつた感じがいたします。（おあり）

（付記）

櫓の両図共、原図の大きそのままの製図ですが、右半分は柱や梁の木組を示し、左半分は壁を塗り、下見板で張つてあることを示しています。（備考）